

本文訓読

尾陽城西、海東郡に田、一千町許り有り。丹波村・森山村・中橋村・花正村・東溝口村・蜂須賀村・二ツ寺・木田村八村共に焉を佃る。初め水落の溝有りて、堰木を以て水を障ぐ。其の田なる也泥腰を埋め、耕耘力を尽すを得ず、以て患いと為す。

享和元年（一八〇一）大水有り、道を越えて流れ下る。道下の村北苧村・牧野村・寺野村・青塚村・蛭間村五村の人、土を道に築き以て水を防ぐ。道上の村丹波村等の人焉を破り水を下す。道下の外村北苧村等五村の人を助けて闘有り。有司これを止む。遂に道二尺を高め、石を建て以て之を證す。

故に水滯ること益々甚し。毎歳登せず。文政十二年（一八二九）田中に溝を開く。其の溝屈曲し水落ちず。八村交々論有り。五年にして平ならず。村長等之を患い官に白す。

天保四年（一八三三）、清洲代官朝田藤三郎保清、帳元役箕浦佐和介賢屯・帳元脇役柳川広左エ門春樹、共に地の理を考え、曲溝を埋め、直溝を開き、水落の溝に達す。糜水目比川に入り、同じく目光川と為りて海に入る。遂に水落ちて耕耘力を尽すを得たり。稲梁前日に倍するは実に三士の力なり。其の徳忘る能わず。故に石を建て以て後世に示す。爾云う。

天保八年（一八三七）四月